

氏名	おう こん WANG KUN
学位(専攻分野)	博士(学術)
学位記番号	博 1176号
学位授与の日付	令和7年3月21日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科 デザイン学専攻
学位論文題目	戦前日本の官立高等教育機関における中国人留学生に関する研究 —デザイン専攻の留学生を中心に—
審査委員	(主査)准教授 井戸 美里 教授 平芳 幸浩 教授 中野 仁人

### 論文内容の要旨

本論文は、20世紀前半に日本のデザイン教育（当時の図案科）を行っていた官立高等教育機関に留学した中国人留学生について考察したものである。研究内容は、留学生の留学機関に所蔵される史資料を通じた在籍期間や在籍身分の基礎的な整理に基づき、当時のデザインを学んだ留学生の留学の実態、さらには、留学生が当時の授業の課題として製作した作品の分析を通して、日本の官立高等教育機関の図案科の教育内容とともに、卒業後の進路や活動を明らかにしている。さらに彼らが留学中に学んだデザインに関する知識や技術について、彼らの帰国後のデザイン活動まで検討することによって、日本でデザインを学んだ留学生が果たした役割を中国近代美術やデザインの発展のなかに位置づけることを目指した論考である。

第1章では、東京における図案教育機関で学んだ中国留学生の動向について明らかにするために、東京高等工業学校（1899年より東京工業大学、現 東京科学大学）と東京高等工芸学校（現 千葉大学工学部）を考察対象としている。前者の東京高等工業学校については、同校を卒業した中国人留学生は帰国後に国立北平藝術専門学校（現中央美術院）で教員を務めたことが知られており、中国デザイン教育の発展の一部を担った点で重要であるが、申請者は、1914年に廃止されるまでの工業図案科の変遷を調べたうえで、東京科学大学資料館に所蔵される工業図案科が印刷した絵葉書の調査および分析によって、それらの絵葉書が同校のデザイン教育の反映と芸術的実践の結果であることを示した。東京高等工芸学校については、同校を卒業後に帰国し武昌芸術専科学校（現：湖北美術学院）に就職した王道平について、王の在学時の課題作品の分析を行うことによって、同校図案科ではコーヒーカップ等の器物や「金属形態研究」などの産業に関わる応用図案が教育内容として重視されていることを指摘した。

第2章では、東京美術学校（1896年より現 東京藝術大学）の図案科における当時のカリキュラム及び担当教員による教育内容について、同校で行われた授業で製作された課題作品の分析を行っている。本章は、資料的な限界があるなか、中国人留学生に限定するのではなく、1930年までに同科を卒業した日本人学生が手掛けたポスター課題の作品について現存が確認できた浅野廉、竹林義一、河野鷹思の三名を対象として分析を行い、「美人画」に着想を得たモチーフから日本や中国の古来の月次の伝統行事を描く作例まで、当時の社会で需要に応じたポスター図案の製作が

教育実践の現場で行われていた様相が浮き彫りになった。

第3章では、東京美術学校図案科に留学して卒業を果たした最初の中国人留学生となった陳之仏（1896-1962）が製作した課題作品や農商務省工芸展覧会の出品作品の分析に加えて、同校図案科で受けた教育の影響とその後の活動について考察を行った。陳の図案にみられるペルシャ美術の装飾的な要素の影響は、同校図案科における「古物学」および「美術史」、「考古学」などのカリキュラムとともに授業内での博物館や美術館の見学、さらには、正倉院の収蔵品を調査への参加などの成果であることを指摘した。

第4章では、これまで中国人留学生の動向について研究が行われてこなかった京都高等工芸学校（1902年より現 京都工芸繊維大学）における教育カリキュラムや図案教育の実態について第3章までと同様に残された課題作品の調査および卒業後の動向について考察している。明治末期から昭和初期にかけて図案科、機織科、色染科には合わせて54名の中国人留学生が在籍したこと、また、外務省文化事業部の補助を受けた中国人留学生が行った日本国内見学旅行についても取り上げることで、同校で学んだ中国人留学生の特色について明らかにした。まず、図案科の教育内容について、同科に在籍した中国人留学生の手掛けた「広告絵新案」などの商業ポスター課題について、京都工芸繊維大学美術工芸資料館における調査と分析を行い、これらの課題作品には、西洋の芸術運動への関心と伝統的な日本の琳派を融合させた同校の教育の成果がみられる指摘した。さらに、機織科、色染科、図案科を総合的に分析することを通して、同校が京都における伝統工芸の発展を新しい産業界における実用的なニーズに沿ったデザインに重きをおく高等実業教育機関として重要な役割を担っていたことを論じた。

以上、本論文では、デザイン教育を行う四つの官立高等教育機関で戦前期に学んだ中国人留学生の動向、さらにはその教育内容や実践について、各教育機関に現存する史資料や当時の課題作品の分析を通して明らかにされた。中国の美術・デザインの近代化の過程とともに、新たな産業の現場において求められた技術や教育を担う人材として、日本に留学したデザイン留学生が果たした役割の重要性が論じられた。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、戦前に日本の官立高等教育機関に留学を行った中国人留学生について、近代の産業化に資するデザイン（図案）に特化した研究である。本論文には以下のように評価すべき点が存する。

第一に、これまでの日本で学んだ中国人留学生に関する先行研究の対象が美術、文学、商業、農業などであったのに対し、申請者はデザインの分野に光を当て大学史関連の史資料や当時の新聞や官報などの再検討を行うとともに、各大学の当時の紀要や学友誌、資料館や美術館での実地調査により、デザイン分野における各官立高等教育機関の中国人留学生の総数や割合、在学期間や在籍身分などの教育史に資する貴重な基礎的なデータを提供した。

第二に、各官立教育機関の図案科の授業の課題内容の検討や担当した教授陣などの分析、さらには、中国人留学生のみならず同時代の日本人の学生による現存する課題作品の調査を通して、

当時の図案教育の実態や各教育機関の教育内容の差などが明らかとなり、戦前期の高等教育機関におけるデザイン教育全体の動向が浮き彫りになった。

第三に、これまで知られてこなかった各教育機関でデザインを学んだ中国人留学生の帰国後の動向について、デザイン分野関連の教育機関や工場への就職などの状況を明らかにしたことである。とくに、日中ともに先行研究が行われてきた陳之仏のような著名な図案家についても、申請者は、東京美術学校在籍時の課題作品、農商務省の工芸展覧会出品作としての工芸図案に加えて、中国帰国後に手掛けた装幀デザインに至るまで浙江省での調査も幅広く行うことによって、日本でデザインを学んだ留学生の帰国後における中国のデザイン分野への貢献が明確に示された。

第四に、先行研究の行われてこなかった京都高等工芸学校図案科の中国人留学生について、図案科における課題作品を大学の美術工芸資料館所蔵の同年代の学生の課題作品とともに分析することによって、同校が開校当初から教材として使用していたアール・ヌーヴォーをはじめとする海外のポスター等の影響、伝統的な琳派模様の再解釈、産業界との連携といった同校図案科のデザイン教育の特色が示された。

審査の過程において、日本で学んだ「デザイン」は、中国帰国後にどのように受け入れられたのか、「図案」が装幀デザインのようなものに限られていたのか、図案家として産業的・工業的な分野における貢献はどれほどあったのか等について質疑応答が行われ、今後明らかにされるべき余地を残している点はあるものの、上記のように、戦前期の日本のデザイン分野の官立高等教育機関において学んだ中国人留学生に関して、新たな史料に基づく実際の図案科の授業内容やその課題作品から分析を行ったすぐれた論考であり、博士論文として十分評価できる。

なお、本論文の一部は、いずれも以下の査読付論文2篇としてすでに公表されている。

#### 査読付論文

①王塙：「戦前期の実業教育機関と中国人留学生の活動について—京都高等工芸学校を中心に—」『アジア教育』第16巻、2022年11月、10-23頁。

②王塙：「戦前期の広告ポスター作品によるデザインの表現—京都高等工芸学校の学生作品を中心に—」『大正イマジュリイ』18/19号、2024年6月、148-170頁。